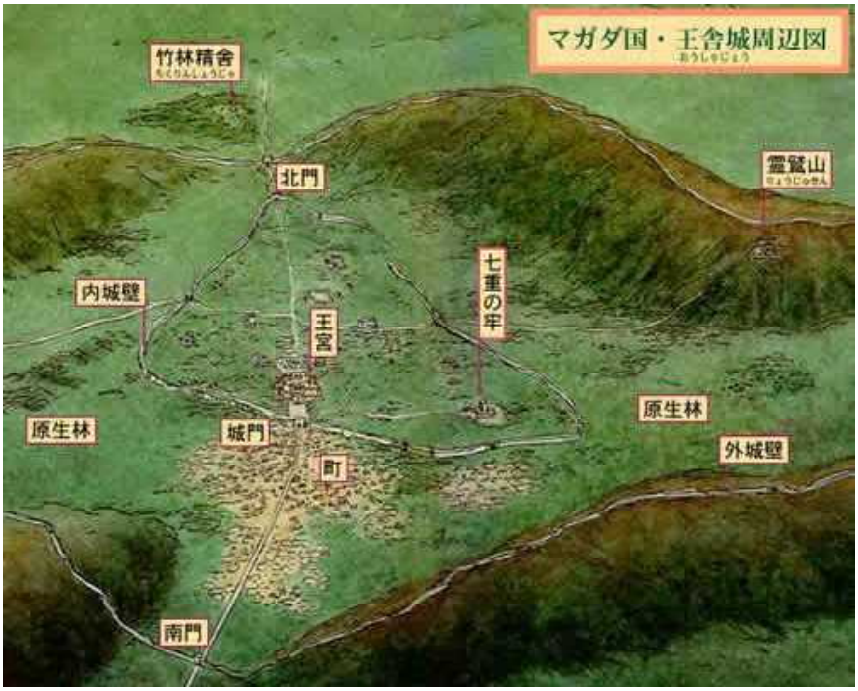
## 浄土系仏教 **王舎城の悲劇**　『観無量寿経』より




今から二千六百年前、釈迦の時代に、インドで最強を誇っていたのは、都に王舎城のあるマガダ王国だった。韋提希（イダイケ）夫人は、その支配者・頻婆沙羅（ビンバシャラ、あるいはビンビサーラとも言う）王の妃であった。

国王夫妻は、物質的には何不自由のない生活を送っていたが、ただ一つ、悩みがあった。二人には子供がなかった。子宝に恵まれぬ韋提希（イダイケ）の不安が惑いを生み、占いの迷信へと走らせたのである。これがすべての悲劇の始まりだった。

占い師が言った。「山奥にいるある修行者の命が尽きしだい子が宿る。それまで五年を要するが彼を殺せばそれは早まる」、と。「修行者を殺してまでは……」と重臣たちは止めたが、韋提希（イダイケ）の説得に押された王は、三百騎の兵とともに山に向かい、修行者殺害に及ぶ。

鮮血が散り、すさまじい形相で国王夫妻を睨みつける修行者。

「おのれ！このうらみ……必ず、はらしてやる！」凄惨な光景は、韋提希（イダイケ）の脳裏に深く焼きつけられた。

やがて、韋提希（イダイケ）は身ごもった。城内は、祝いに来る近

隣諸国の使者でにぎわうも、夢の中で、酒宴の席で、襲い来る修行者の幻影に、韋提希（イダイケ）は憔悴してゆく。夫にも胸中は理解されず、苦しみはまた、惑いを生み、再び占い師にすがる。「実は…太子様はご両親に大変恨みをもって宿っておられます。成長されると、きっと親を殺されるお方になるでしょう」。占い師の言葉に、いよいよ追いつめられた韋提希（イダイケ）は、ついに、世にも恐ろしい計画を立てたのである。

産室を二階に設け、下の部屋に剣の林を作る。ひと思いにそこへ産み落とすのである。頻婆沙羅（ビンバシャラ）王も、韋提希（イダイケ）の必死の懇願に、共犯を担うことになった。

ところが、生まれた子供は小指一本切り落としてすんだのである。

産声を聞き、もはや殺意失せた二人は、その子を阿闍世（アジャセ）と名づけ、蝶よ花よと育てるが、そのうち異常な凶暴性をあらわにしてゆく。

悪魔に魅入られたごときわが子の暴虐に、この世の地獄へ転落していった二人は、釈迦の説法に耳を傾けるようになる。やがて、頻婆沙羅（ビンバシャラ）王夫妻は、釈迦教団の強力な支援者となるのである。

尊名、天下にとどろく釈迦を妬んだのが提婆達多（ダイバダッタ＝提婆（ダイバ））である。釈迦教団を乗っ取ろうと野心に燃える提婆（ダイバ）は、釈迦を殺そうと策を練る。

一度目は、高所から釈迦めがけて岩を落とすが失敗。二度目、野象に酒を飲ませてけしかけるも、釈迦の偉大な尊容に触れた野象は、猫のようにおとなしく前足を折ってしまう。

やがて、提婆（ダイバ）の目は阿闍世（アジャセ）へ向けられる。

釈迦の威勢は頻婆沙羅（ビンバシャラ）王と韋提希（イダイケ）にあると思った提婆（ダイバ）は、巧みに阿闍世（アジャセ）に取り入り、絶大な信頼を得るようになる。

時機を窺い提婆（ダイバ）は、阿闍世（アジャセ）出生時の小指の秘密を暴露する。「おのれー、そういうことであったのか！」一切を聞かされ、怒り心頭に発した阿闍世（アジャセ）は、阿修羅のごとく怒り狂い、頻婆沙羅（ビンバシャラ）王を七重の牢にたたき込んだ。

釈迦は、この王の苦しみを察知し、二人の弟子を遣わし、説法を命じた。

一方、韋提希（イダイケ）は食べ物を牢へ隠し持ち、王は心身ともに命をつないだ。すなわち、浴して身体を清め、炒（い）り麦粉に蜜を混ぜ、これを体に塗り牢獄へ入って、体に塗った炒り麦粉を集めて王に進めたのである。

これを知った阿闍世（アジャセ）は激怒した。「俺の敵に味方する奴は、母といえども敵だ、許さん！」

ついに殺母の剣は振り上げられた。二人の側近の諫めに、剣は鞘におさめられたが、韋提希（イダイケ）もわが子、阿闍世（アジャセ）によって七重の牢にぶち込まれてしまう。

牢獄でのたうちまわる韋提希(イダイケ)。霊鷲山(りょうじゅせん)で『法華経』の説法をしていた釈迦に、韋提希(イダイケ)の悲痛な心の叫びが届き、救済に向かう。

仏の慈悲は、苦しむ者にひとえに重い。『法華経』の説法を中断しての決断は、釈迦出世の本懐中の本懐である、阿弥陀如来の本願を説くことにあった。

愚痴の限りをぶつける韋提希(イダイケ)に、ただ、釈迦は慈眼を向ける。有名な無言の説法である。

愚痴の行き場をなくした韋提希(イダイケ)が、五体を投地したのを見届けた釈迦は、眼前に光輝く十方諸仏の国土と、阿弥陀仏の極楽浄土を照らしだし、定善十三観*と散善三観**を説いたのである。

* 阿弥陀仏の極楽と極楽に往生する方法　　** 阿弥陀如来の慈悲が衆生に受けとられる有様

実行して初めて、善のできない、地獄しか行き場のない者と知らされた韋提希(イダイケ)は、深い苦悶におちていった。

その時「韋提希(イダイケ)、今よりその苦しみを除く教えを説こう」と釈迦が言うと同時に、姿が消え、空中に金色輝く阿弥陀如来の姿が現れたのだ。阿弥陀如来を拝そうとする一念だけで、韋提希(イダイケ)の暗黒の苦悩は晴れわたり、歓喜胸に満ち、韋提希(イダイケ)は光明の広海に浮かんだのである。

歓喜に一転した韋提希(イダイケ)の様子に驚き、阿闍世(アジャセ)は母の手をとって牢から出す。やがて、阿闍世(アジャセ)も真実の仏法を聞くようになり、永く仏法布教の強力な支援者となった……

ある HP（現在消滅）より　　（小阪が編集）